

## 最期の時のこと(リビング・ウィル)を本人に書き残してもらうことは必要か

11

直腸がんの夫が肺転移し、抗がん剤治療を受けることを悩む。相談者である妻は、「もう疲れた」とピアサポーターに何度も言う。

### 1 相談内容 70代女性 直腸がんの夫の相談

相談者の夫Cさん(70代)は、3年前に直腸がんの手術をした。その後、1年足らずで肝臓に転移していることがわかり、肝臓の転移部分を切除する手術を受けた。今回のCTの結果、肺への転移があり、腹部リンパ節にも転移していた。主治医に手術はできないと言われ、夫も自分も大きなショックを受けている。

最初の術後の抗がん剤で副作用に苦しんでいたが、それでも近所に借りた土地で趣味の家庭菜園をやり、愛犬の散歩にも出ていた。これが生きがいという。今回、夫は抗がん剤治療を受けることを悩んでいる。もう抗がん剤をしないで、やりたいことをやりたいと言う。しかし相談者は「治療をしてほしい。もうダメと言われて、がんが消えた人を知っている」と言われる。

先日、看護師をしていた親族から「本人のためにも、最期はどこで療養したいか、延命治療をどうするか本人の意思(リビング・ウィル)を書いて残しておいてもらうことも大切よ」と言われた。急に、夫の状況が身につまされ、悲しくて泣いてしまった。主治医から余命を告げられたわけでもなく、抗がん剤治療のことしか言われていない。最期はどうかなんて本当に必要なのかどうかと少し強い調子で話された。「もう疲れた」と、ピアサポーターに何度も言われた。

### 2 相談内容のポイント

- 1 治療に希望を持っている家族に対し、親族から最期の時の準備を勧められ、つらい思いをした。
- 2 夫は、がんが繰り返し転移し、抗がん剤治療に耐えている。その夫を支えている妻の精神的な疲れも感じられる。

### 3 ピアサポーターの対応のポイント

- つらい闘病生活の中で不安やつらさからくる家族の気持ちをゆっくり傾聴した
- 親族の「最期の時の準備」についての話は、看護師としての経験から、最期の時に本人が望んでいない延命治療を受けて苦しむことのないよう、親身になって考えているからこそその言葉と思うと伝えた。
- 相談者が疲れ気味であることに対して睡眠や食事・疲れの回復について話し合った。
- 夫は家庭菜園や犬の世話が生き甲斐ということであり、菜園の成果などを伺った。グリーンセラピーといって、植物を育てることは心身に良い効果をもたらすという話をすると、表情が明るくなった。
- あなたの夫だったらどうするかと聞かれたので、本人がどうしたいかを大切にしたい思いと、自分がこうしてほしいという思いで悩むと思います」と伝えたら「本人がどうしたいか・・・」とつぶやかれた。

## 4

## ピアサポートの結果

少し吹っ切れたような表情をされ、「もう一度、夫とよく話してみます」と帰られた。

また来てもいいかと言われ、「いつでも気軽にお越しください。電話でもいいですよ」と、サポーターの担当日を伝えた。

## 5

## 対応したピアサポーターの所感

ピアサポーター自身はリビング・ウィルを残しておくことは必要だと考えており、自分自身もすでに準備している。

しかし、まだ希望を捨てていない患者の妻に「必要だと思う」と断言することはためらわれ、相談者の最後の質問を抽象的な形で返答した。

相談者自身は、ピアサポーターの「本人がどうしたいか」という言葉に反応され、少し何かを気づかれたようだが、相談者の「最期の時のことを書き残してもらうことは必要なのか」という問いかけの背景には、自分自身の希望を支えてほしいという思いがあったのだと思う。これでよかったのかどうか、反省が残る対応となった。

## 考察

## この事例から学ぶこと

相談者の想いや苦痛に寄り添い、どのように終末期を過ごしていくかを家族で話し合うことができるように支援する。

## 【事例の背景と課題】

この事例の問題点として、①相談者と患者さん、ご家族との認識のズレがあること、②最期のことを相談者の意に反して突然考えなくてはいけなくなったこと、③相談者の身内に、相談できる相手（自分の意見を理解してくれる相手）がいないこと、があります。さらに、「もう疲れた」という言葉の背景には、この①～③に加えて、看病による（だれにも言えない）疲労と不安があると思われます。

リビング・ウィルは、自分で意思決定が出来なくなったときのために必要であり、また残される家族のためにも必要だと言われることがあります。しかし、人の意思は時期・状況によって揺れ動きますから、リビング・ウィルも大事ではありますが、それ以上に、一つ一つの内容をその都度相談しながら考え、どのような最期を迎えるようにしていけるかを話し合っていくその過程に意味があると言えます。

## 【講評】

事例の背景には、自分の想いと周囲の状況との間にギャップ（ズレ）が生じたことによる苦痛が生じ、相談者が「もう疲れた」状況に陥ってしまったと考えられます。相談者はご自分の味方を探しに来たのだと思われるので、それに沿いつつ話を進める必要があります。また、どう工夫するとそのズレを改善できるかを、相談者が自然に気づいていけるように、ピアサポーターは寄り添う必要があると思いますが、今回はそれが十分にできていたからこそ、「また来てもいいか？」という言葉につながったのだと思います。

相談者とピアサポーター、医療・介護・福祉関係者をつないでくれるのは、語りです。今後の連携に向けた課題は、どのようにして語りをつないでいくかを考えていくことと言えるのかもかもしれません。考えて書面に書き記すだけ捉えられない感情の機微がみられるのは、そのつど行われる語りであり、その機会・そのプロセスこそがアドバンス・ケア・プランニングだと思います。そうしていくことができれば、「リビング・ウィル＝最期のことだけを話し合う、悲しい、つらい」というような印象はめぐわれ「その経過をどう過ごしていくか」に焦点があたり、人々の価値観を大切にしながら家族で話し合えるようになると考えます。